

【主題】 花育(はないく)

【副題】 ～花の栽培を通した子どもの育ち～

【クラス名】 2歳児 らっこ組

1、主題設定と理由

進級当初、大きな環境の変化による戸惑いから気持ちが不安定になる様子が見られた。気分転換に園内や園外を散歩すると、植物に興味を持ち心が落ち着く様子が見られた。進級して1ヶ月経っても登園渋りが落ち着かない様子が見られた為、保育室から見えるところに植物がある環境が心の安定に繋がるのではないかと考えた。そこで、保育室脇のベランダを活用しながら植物を育て、子どもの様子の変化を観察した。

2、実践内容

種から育てることでより愛着を感じられると考え、担任間で相談をし、比較的育てやすいとされている朝顔とミニヒマワリの栽培を行うことに決定した。

【種蒔き(5月15日)】



活動前に種の入っているパッケージを見せると興味を示し、育てる花のイメージを持つことができたようだった。花の名前を知らない子がほとんどだったが、保育者の真似をして「あさがお」「ひまわり」と声に出す様子があった。その後、種を観察しながらポットに土を入れて種蒔きを行った。砂遊び用の小さいスコップでポットに土を入れ、小さい種を優しく手に持ち種蒔きを行っていた。

【水やりと芽の観察】

名簿順に毎日4・5名ずつ、水やりを行った。5月21日に朝顔とミニヒマワリの種から芽が出ると、その様子を喜んで観察していた。5月23日、ミニヒマワリの芽が虫に食べられて無くなっていることに気付い

た。子どもたちに今後の栽培について相談をしたところ、Hくんより「ひまわり、バイバイしたくない。」との発言が聞かれた。そのため、再度種を蒔き直し、育ててみることにした。

芽が出てから1週間が経過し、朝の登園時に保護者と離れられない子も、保育者が「芽、大きくなったかな？」

「朝顔とヒマワリを一緒に見てみよう。」等と誘うことで、スムーズに保育室内に入る姿が増え、少しずつ愛着を持ち始めている様子がうかがえた。水やりに意欲を見せる子が増えたため、当番表を作成し平等に当番活動を行うことが出来るようにした。当番表を可視化することで自分の順番を楽しみにし、進んで水やりに取り組んでいた。



【朝顔をプランターに移し替える、再度ミニヒマワリの種を蒔く(6月11日)】

朝顔の芽が大きくなってきたため、プランターに苗を移し替えた。並行して、ミニヒマワリの種蒔きも行った。植え替えの際は、力加減が分からずに葉をつまんだり、直接土をかけたりする姿があった。保育者が「優しくね。」と声を掛けると、徐々に優しく触れようと意識する姿が見られた。ミニヒマワリは種蒔き後、虫除けの為ある程度の大きさに育つまでは2階のバルコニーに置き、成長の様子を見ていくことにした。



【朝顔の成長観察、

ミニヒマワリ苗植え替え(6月27日)】

朝顔のつるが伸びることを予測し、支柱を立てた。数日後、つるが伸びてくるとその様子を興味深く観察し、「葉っぱ大きい!」「背が伸びた。」と成長を喜んでいました。登園後、Aくんより「葉っぱが見たい。」と自分から保育者に伝える姿が見られた。このことがきっかけとなり、子ども自身から観察を望む姿が増えた。ミニヒマワリは虫に葉を食べられることなく、無事に植え替えの時期を迎えた。植え替え時には、前回の経験を活かし、優しく苗を扱う様子が見られた。



【ミニヒマワリ・朝顔に蕾ができる～開花】

7月24日、朝顔・ミニヒマワリ共に、蕾を持ち始めた。子どもたちは蕾の存在に気付いてはいなかったが、保育者が伝えるとじっくりと観察していた。蕾から花が咲くことが分かったと、何色の花が咲いて欲しいかという話題で会話を楽しむようになった。保育者が尋ねると「ぼくは黒がいいな。」「わたしはピンク!」と自分の考えや願いを話す様子が見られた。



8月に入り花が開花し始めると、花の形や色に着目し、観察を楽しむ姿が見られた。特に朝顔は、数種類の色の花が咲いたため色の違いを見比べ、友だちや保育者と会話をしながら観察を楽しんでいた。

【花摘み・種収穫】

夕方になると、朝顔の花がしぼんでしまうことを惜しむ姿が見られた。いつまでも花を身近に感じることができるようにと保育者間で相談をし、花びらを使つての染め紙制作を計画した。しぼんだ花を保育者と一緒に摘み、制作の準備を行った。花や葉に触れる経験が今まであまりなかったためか、その感触を面白がる姿が見られた。摘んだ花は変色を防ぐため、制作期間までは冷凍保存することにした。

10月になり、花が少なくなってくると、朝顔には緑色の種の房が次々にでき始めた。その様子に気付いたAくんが、「ここに種ができるんだよ。」と周囲に教える姿があった。そのことを保護者に伝え、園での栽培をきっかけに植物に興味を持ち、図鑑を購入し家で見ていたとのことだった。活動をきっかけに、探求心が育まれていることを感じた場面だった。

11月に入り、茶色くなった種を房から取り出す作業を行った。細かい作業だったが誰一人嫌がることなく、集中して取り組んでいた。ミニヒマワリの種は、中が空洞で、綺麗な種になりきれないものが多かった。朝顔は種がたくさんでき、皮をむきながら「いっぱいある!」と収穫を喜ぶ姿が見られた。



【朝顔染め紙制作（11月6日）】

冷凍保存していた花びらを使用し、染め紙制作を行った。子どもたちが扱いやすいように折り紙サイズの障子紙を用意すると、好きなように折る姿が見られた。ペアでの活動にしたため、月齢の高い子同士のペアは「三角、一緒だね。」等と話しながら、折り方を揃えていた。排水溝ネットの中に花びらを入れて絞り出す際は、ダイナミックに揉んで色を出す子もいれば、手に色が付くことに抵抗を示し、ほとんど触れることができない子もいた。色の出し具合や紙の付け方により、同じ花びらを使用しても色合いや形が異なり、個性的な作品に仕上がった。Sくんは仕上がった模様を見て「くまの形みたい。」と喜んでいて、作品は色褪せないようにラミネート加工をし、保育室入り口に掲示した。制作時の写真を一緒に掲示したことで、登降園時に親子で制作の様子を話しながら見る姿が多く見られた。



【種の持ち帰り（3月24日）】

3学期終業式に、朝顔・ミニヒマワリの種を1人2～3粒ずつ持ち帰った。何の花の種かを子どもたちに尋ねると、「朝顔！」「ヒマワリ！」と答え、育てた花を覚えている子がいた。育てた場所を尋ねると「あそこで育てたね。」とベランダを指差し、花を育てる活動を振り返る姿があった。降園時に種を手渡すと、嬉しそうに持ち帰っていた。保護者の中には「春になったら種を植えてみよう。」と子どもに声を掛ける方もおり、家庭での栽培体験に繋げることができたのではないかと感じた。



【実践結果と考察】栽培を通した子どもの育ち

○心の安心材料

進級当初登園しぶりをしてしていた子も、朝顔やミニヒマワリの成長を楽しみにし、笑顔で保育室内に入ってくるようになった。泣いている子も、ベランダに出て花を観察すると自然と涙が止まることもあり、花の栽培を通して情緒が安定していく様子うかがえた。

○観察する力・探求心の芽生え

・芋虫との出会い

花への水やり時に、朝顔の葉から芋虫を発見した。しばらくは水やり時に芋虫の様子を観察していたが、子どもたちの関心が高かったため、虫かごに入れて飼育することにした。飼育を通し、朝顔の葉を食べている

所、体の色が変化する所、大きいフンをする所を実際に見ることができ、虫の生態を知る良い機会となった。また、年長児が育てていた野菜のプランターで同種類の芋虫・神明神社では異なる種類の芋虫を発見し、「似ているね。」「ちょっと違う。」等と比較して話をする姿も見られた。戸外活動でトンボやバッタ、アリの観察をしたり、家庭で虫を飼育したりする子も増え、生き物への関心の高まりを感じた。



○友だちとの触れ合い・気持ちの共有
種植え・水やりなどの共同作業を通し、子どもたちの中で「一緒にやろう。」等と、自然とコミュニケーションが生まれ、友だちと一緒に活動することの楽しさを感じることができたようだった。言葉の獲得に伴い、植物を見ながら自分の気持ちを話す様子も増え、自己表現をする力も育まれているように感じた。また、成長過程を共に観察し、花が咲いた際には「見て、咲いたよ。」と喜びを共有するなど、栽培を通して友だちとの繋がりや輪の広がりが見られた。



○五感の育ち
栽培を通して、土・葉・花・種の大きさ、高さ、感触、匂いを感じる経験ができた。特に、花が咲いた際には自ら顔を近づけ、花の良い香りを嗅ぐ姿が見られた。栽培当初は保育者から「土を触ってみてごらん。」等と触れる事へのきっかけとなる言葉がけを行っていたが、

徐々に子ども自身が積極的に葉や花に触れたり、高さや大きさを見比べたりするようになった。栽培を通じて自然の中で多くの発見をし、五感を使って豊かな経験を重ねて行く様子がうかがえた。

○感性を育む

花を栽培しながら、子どもたちと保育者が「可愛いね。」などと感じたことを共有することで、徐々に様々な表現が出てくるようになった。戸外活動では、花が揺れるとその動きに対して「踊っているね。」や「喜んでい

○生き物を大切にする力

植物を育てる中で、葉や花への触れ方を学んだり、芋虫を飼育する経験を通じて、見るだけではなく実際に水や餌となる葉を与えたりする姿が見られた。これによって、命を育むことへの意識が高まり、生き物を大切にしようとする気持ちが自然と芽生えたことが感じられた。生き物と向き合うことで、命を尊重する力が育まれ、そのことが人としての優しさや思いやりにもつながっていくのではないかと感じた。

【まとめ】

当初は花の癒し効果を期待して始めた取り組みだったが、研究を進めるうちに、それ以上のさまざまな効果が見られた。植物や生き物に触れることで、命を育む大切さを自然に学ぶことができ、子どもたちにとって貴重な経験となったのではないかなと思う。植物の水やりや芋虫の飼育を通じて、生き物に対する思いやりや尊重の気持ちを育むことができたことは、今後の子どもたちの社会生活や人間関係にも良い影響を与えるのではないかと感じた。

